
Love Tears*

瀬戸姫那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Love Tears*

【Zコード】

Z8462P

【作者名】

瀬戸姫那

【あらすじ】

ある日の夜、少女は知つてはいけない秘密を知つてしまつ。それが耐えられなくて、少女はある行動を起こす。そんな時、少女が見つけたものとは……。

*プロローグ

「もう、家に居られない……」

私は自室のドアを閉めた瞬間、力なく呟いた。覚束ない足でベッドに向かい、仰向けに寝転ぶ。

しばらくはなにも考えまいと天井を見ていたのだが、大きく深呼吸すると私の頬にすーっと生暖かいものが流れた。それは止めどなく川のように緩やかに流れゆく。

はあー……と息を吐くと、いきなり嘔吐に似た感覚に襲われ咄嗟に両手で口を塞いだ。

このままでは何もかも、”吐き出して”しまったのだ。私は布団にもぐつて、声を殺しながら泣いた。この声を聞かれないうちに悟られないよこと、小さく丸まって泣いた。

守るよつて自らを力強く抱きながら、ずっと夜が明けるまで……泣いた。

こんなに泣いたのはきっと、赤ちゃんの頃以来ないのだろう。幼稚園に上がる頃はよく転んでいたが、痛くても必死で泣かないようにしていた。

小さい頃、涙を人に見せることが絶対に嫌だと思っていたのは確か。多分、何かのトラウマだらうとは思つけど、原因は覚えていない。

気丈というか、我慢強いというか、いわゆる意地つ張りである。これが今でもそつなのだから、たちが悪い。

「支度、しなきや……」

うすらうすらと日が明けてきた頃、私は重い体を無理やり起きてベッドから降りた。

まずタンスに向かい、中にある服全部を出した。押入れからは修学旅行で使ったボストンバックをとりだし、入るだけ服をその中に

適当に詰める。たたんだ方がいいっぱい入ると思つたが、その時の私には余裕なんてなかつた。

早く早くと自分自身を急かすばかりでなく、中々入らない苛立ちさえあつた。

後は、携帯、充電器、財布、貯金箱。後は学校で使う教科書や筆記用具があれば十分。

それらはいつもの学校行くときにつかっているスクールバックに入れた。幸い、私は教科書はほとんど学校へ置きっぱなしなので、量が少なくて済んだ。スクールカバンを背負い、ボストンバッグを肩に掛ける。

準備はOKとばかりに私は力強く頷く。
一旦息を整えて、そつとドアを開けた。

首だけドアから出して周りを見渡す。誰もいないようだが、私の隣の部屋は兄の部屋だ。慎重にと思っていたのだが、廊下にまで聞こえてくるイビキで熟睡していると分かりあまり氣を留めず、兄の部屋を通り過ぎる。

一階には両親の部屋があるが、玄関に行くまでには通らない。階段を下りたら右にすぐ玄関がある。ただ気配を消して、慎重に階段を下る。

下り終えた私は玄関に置いてある運動靴を、足に宛がつた。

靴を履ぐゴソゴソつという音がやけに大きく響く。息を轟めていても鼻息がうつすらと聞こえてくるぐらいの静けさ。心音すらも聞こえてくるような気がする。

私は靴を履き終えて後ろを向き、ゆっくりと口を開いた。

「…………」

声とはいひ難いぐらい小さなものだつた。きっと誰にもこの思いは届いてないだろうから、それでもよかつた。

家に背を向けて、私は一步一步足を踏み出す。

気持ちと比例したかのように……それはだんだん早くなつていいく。

知らなくてよかつたことを知つてしまつた。

その事実は私にとつてあまりにも残酷すぎる“もの”だった。

知りたくない……知りたくないつつ。

そう、心に言い聞かせながら、私は人気のない道を走り続けたのだ。
ひとけ

* プロローグ（後書き）

こんばんは、初めまして、瀬戸姫那です。

連載小説スタートしました。

あとがきは何かの区切り区切りに書いて行きたいと思います。

最初から重い空氣ですみません。

あまりこういう暗い雰囲気なものを書いたことないんですけど、大丈夫でしょうか。

一応恋愛小説なので、あとから私の好きなあまあまな話になつていきます（笑）

実はBL以外の連載は初めてで、上手く書けているか心配です。更新は遅いと思いますが頑張って書きますので、これからよろしくお願いします。

* 1・家出少女と

“あらわるあらわるあらわる~~~~”

お腹からなんとも情けない音が鳴った。

(そりいえば、夜食食い損ねたんだった……)

私は優しくお腹をさする。

夜食をこつそつ食べようと台所へ向かつた際に偶然聞いてしまった話に夢中で、お腹がすいていることをすっかり忘れていたのだ。ふとその時のことを思い出して、胸が苦しくなった。

(思い出しかやダメっ。私はなにも知らないー知らないんだから……)

首をふって顔を強く叩き、前を向く。

家から約40分。近くにあったコンビニに寄り、私はロロロロチキンとお握りサイズのます寿司を買つた。どちらも私の大好物である。

「美味しい……」

歩きながら、私はそれらを勢いよく頬張る。いずれも5分もしない内に食べ終わつた。

「まはは近くにあつた公園の『まは』箱に捨て、私はある場所に向かつた。

本条学園と書かれた正門。ここは私がいつも通つてゐる高校だ。田の前にある大きな門の端の小さなドアを開けようとする。だが、強く搖すつても叩いても開かない。……どうやら鍵がかかっているようだ。

いつなつたらと私は門を登り、ボストンバックを下に落としてからそこ飛び込んだ。

通つている学校とはいゝ、これは立派な不法侵入である。だが、校舎外には防犯カメラも防犯システムもないと知つてゐる。

しかもバレないと確信してる。私は悪い笑みを向けた。

時計をみると、時間は六時を少し過ぎたところだ。おやじく校舎も開いてないだろう。

(中庭のベンチで少し休もうかな……)
私の下敷きになつているボストンバックの埃をはらいながら、向かつた。

ただ淡々と、なにも考えずに……。

＊＊＊＊＊

「あんた、“また”なの……」

机に顔を伏せていると、溜め息混じりの声が頭から降つてくる。

(ここの声は……)

私は小さな溜め息をつく。顔を見なくても分かる。いや、嫌でも顔が浮かんでくるのだ。

ゆっくり顔を上げてみるが、焦点が合わない。まだ若干寝ぼけているようだ。

「何が?」

それが、ひどく気に障つたらしく、彼女は眉間に皺を寄せて大声を放つた。

「涼音!—あんた、また家出いえでしたんでしょう!—!—!
彼女が指差したのは、私のボストンバック。

「そうだけど」

母親のように口うるさいのは、幼馴染の花沢美咲はなざわみさき //サである。幼稚園の時からの仲だけど、性格は真反対だ。

小さい頃から私に世話を焼いている。それは私が頼りなく空氣のようだと過ごしているせい。

私自身はその生活が好きだから別にいいのだが、美咲が言つて」頼りないだけならいいけど、涼音は変に強がるから危なつかしいらしいのだ。

それでも一緒にいるのは、なんだかんだ言つてもこのポジションが居心地がいいのだ。私も美咲もそんなこと言わなくとも分かつてるし、思い合つている。

「だいたい涼音は！」

「はいはい」

私はムキになつて言い返さうとはせず、美咲の問いにうんうんと自然と受け答えしていく。

このやり取りは”いつも”ことである。そしてこの煩いやりとりをクラスメートは、いつも黙認しているのだ。
クラスメート曰く”反抗期の少年と口煩い母”といつことらしい。「ちゃんと聞いてるの！？私は涼音に”悪い印象”が残つたら困るから言つてるのよ」

その言葉に私はピクリと反応眉を少し寄せた。それはちょっとした嫌悪の表れだった。いま最も私が嫌う言葉だったから。

「……だから？」

素つ気ない態度に、美咲はついにキレた。私の机をドンと叩き、強い眼光で私を睨めつけた。

「だ・か・ら？……あんた！！毎回毎回家出少女なんかやつて！！…

いつかその辺の男に食べられちゃんだから…！」

そう激高しているミサの後ろに大きな影がひとつ。その影は美咲の肩をとらえた。

「男に食べられちゃうだなんて、”みさき”ちやんつたら卑猥

「黙れ」

美咲はすばやく後ろを向き、大きな拳を作りその影に大きくなげんこつ一つ。

「……ぐつ、いってえ――――！」

影 篠崎悠真は、痛そうに頭を抱え、叫ぶ。

「大げさね。男なんだからそれくらいで大声あげるんじゃないわよ」「みさきちゃんに、僕のこと見てもらいたくてさー」

美咲は呆れたと大きな溜息をついた。

悠真くんは美咲のお隣に住んでいて、やたらと美咲にちょっかいをかけてくる男の子。

小さいころから3人で一緒に遊んでいるのだが、その時からこの調子だ。あの頃はちょっかいだしすぎで美咲を泣かせることがしおちゅうだった。だけど、私は知っている。

ちょっかいをだすのは、美咲だけ。

悠真くんは美咲にあしらわれても、ただただニコニコしていた。それを見た美咲も照れくさそうに笑っている。

「あのー。そのカツプルいちゃいちゃしないでいいから」

その言葉に過敏に反応した美咲は、さつき以上に怖い顔で睨めつけてきた。

「カツプルじゃない！」

美咲は必死に怖い顔を作っているけど、顔が真っ赤だ。面白くて笑いそうになる。悠真君も私と同じで、くくくと笑っている。この雰囲気に気まずくなつたのか、美咲はさつきまでの話題に無理矢理戻した。

「悠真のことはどうでもよくて、涼音ー今日は家に帰りなさいよ」「いいや」

今回ばかりは帰りたくないし、帰れない。

「ミサの家に泊めてえ？」

甘えた声で美咲に頼んでみるが、それは悠真に遮られた。

「それは駄目、今日は俺が行くから」

「二ヶ」つていう効果音がつきそうなほど満面の笑み。
(独占欲強いなあ……)

苦笑いも通り越して、溜息すらでない。女の私にまで、此処までの独占力を見せつけてくる。

仮にも私も幼馴染なんだけど?って言つてみようかなと思つたが、

悠真という男には通じないとなんとなくわかる。
(本当に悠真くん、美咲のこと好きだよね……)

「やつこことならいいけど?」

しうがないなど、次の思惑を考えてみると、何やら喧嘩声(?)
がする。

「何言つてんのよー悠真!」

「何つて何が?」

「そんな約束してないわよー!」

「そんな約束つて、みさきひやんの家に行く」と。

「そつそりよつ」

「ああーじゃあ、約束すればよかつた?」

「そういう意味じゃないわ」

「じゃあ、みさきひやんが思つてるのをひやんと言つてよ?」

「悠真の……悠真の……ゆづまのばかあーーー!」

何、朝からイチャついてるんだ、あのバカップル。

一人を見ているクラスメートらは、せつと心の中で溜息をついて
いるだろつ。

クラスの中にそんな空気が流れているとは知らないだろつ一人は
まだ言いあつている。

こんなやりとり聞けば誰もが一人は恋人だと思つけど、実は一人
付き合つていない。カップルの自然消滅つてあるけど、この一人の
場合自然成立?つて感じだろうか。

どちらかが言えぱいといふと思うだが、一人の性格上難しい。

私が手助けしようと思つたこともあるのだが、美咲は絶対認めよう
としないタイプだし、悠真くんは言つてゐるようみて、実は
怖がつてゐるのだ。漂々とした言葉じやきっと云わらない。それは
悠真自身も分かつてゐから口は出していない。

実質見守ることしかできない。いろいろと口出せばきっと余計な
お節介だろつ。

私は席を勢いよく席を立つた。

「じゃあ、その夫婦！私もちょっと行ってくるから…」

ボストンバックを持つて、私は教室を出ようとすると。

「ちょっと……ってまさか涼音、またアイツの所に行くの？」

美咲はちょっと嫌そうに、アイツと言葉を吐いた。

「そうだよ。だって今日宿なしだもん、頼みに行かなきゃつ」

美咲と反対に、悠真君は盛大に送り出してくれる。

「行ってらっしゃい、涼音。具合悪いとでも先生に言つとこでやるから」

「ありがとう、悠真くん」

悠真くんに軽く礼を言い、私は教室を飛び出した。

スキップするように廊下を走っていく。階段で転びそうになるべらいはしゃいでいた。

(この時間に行くの、久しぶりだなあ……)

始業時間間近、教室と反対方向に行るのがおかしかったのだらう。

私のクラスメートが不思議そうに声をかけてきた。

「あれ、涼音？何処に行くの？」

「ん？先生のところ！」

クラスメートはそれだけで分かつたらしく、うんと頷いた。

「ああー大好きな先生のところに行くのね。いつてらっ」

…。
そう。私が向かっているのは、大好きな先生のところ…

* 1・家出少女と（後書き）

こんばんは。瀬戸姫那です。

どうやらスランプに入つたようです。

最初の投稿から随分あいてしまいました。

書きたいけど、文が上手く書けないという状況です。書かなければいいのかなと思うのですが、書きたい衝動があり精神的にうまくいきません。

一応ストーリーは考えてあるので、続きを書いて行きます。

続きを読むと波に乗つていくタイプなので（笑）この話については、スランプが抜けた頃に内容が崩れないように、文の修正を行いたいと思います。

中途半端でごめんなさい。

凍結だけは避けたいので、頑張つて書きたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8462p/>

Love Tears*

2011年1月12日23時55分発行